資料５

森が元気に、人が元気に

仲間づくり10年のあゆみ

矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）

写真で見る矢森協の10年

＜とよたオイスカ森林塾＞

第1回森林塾　2003/2/16

第2回森林塾　2003/3/15

第4回森林塾　2004/12/5

※ 2006年から、とよた森林学校「森林塾」が跡を継ぐ

＜矢森協　発足式　2004/1/18＞

矢作川水系森林ボランティア宣言

大雪の中、集合

林内で技術研修

※表紙の写真も発足式

はじめに

「ヤモリキョウ？」よく聞き返される。「矢作川水系森林ボランティア協議会」という正式名がきちんと表記されることは稀だ、長すぎる分どこか間違えられる。新興宗教に誤解されないよう神経を使ったりもする。確かに怪しい集団ではある。

矢森協は、「矢作川およびその周辺流域で活動する一定レベル以上の森林ボランティアグループで構成」（規約 2 条）されている。一定レベルとは、とよた森林学校の初級間伐講座を修了したのと同等レベル、すなわち森林調査からチェーンソーによる伐木・造材から搬出までを学び、実践できるレベルを言う。ボランティアとしてはなかなかハードルが高い。それもグループでなければならない。きちんと学び、仲間をつくり、「森林ボランティア宣言」に共感できるグループで構成され、毎年新しいグループが誕生している。

矢森協の活動は、森の健康診断とモデル林事業が両輪となっている。森の健康診断では釣り竿を持って各地に出掛けて森健を普及する。モデル林事業はチェーンソーを担いで、山主さんや地域と交流しながら間伐する。各グループでは、バリバリ間伐から、木工、自然観察、森の露天風呂作りまで、てんで勝手なことをやりたい放題だ。

森の健康診断などのビッグイベントは準備から報告会まで大変だが、どういうわけかみんな喜々としてよく動く。代表はいつもウロウロオロオロするだけなのだが、傍から見ていると、誰も命令しないのに実に自律的で柔軟に対応する不思議な集団だとよく評される。

毎月、定例評議会には各グループ代表が集まり、自慢と葛藤を持ち寄り情報交換する。そんなことを延々10 年間繰り返してきた。

このようなおかしな集団がどのように発生し進化してきたのか、10 年を機にふりかえってまとめてみようと誰かがそそのかした。何よりも矢森協の新しい仲間たちと未来の仲間たちに伝えておきたいと思った。いつもの飲んだ拍子の思い付きと妄想がどんどん現実化し、ついにできてしまった。誇張はあってもほとんど事実だ。しかし、すべてではない。ほんの一部に過ぎない。みんなの思いやドラマは膨大で、この 100 ページには収まり切れるものではないのは承知だ。流域の森と人への矢森協の仲間たちの思いを受け止め、軌跡を知ってほしい。そして、私たちとつながった無数の方々に感謝。

矢森協　代表　丹羽　健司

もくじ

※表紙の写真は発足式

森林ボランティア宣言 ..... 表紙裏

写真で見る矢森協の10年 1

＜コラム＞矢森協の活動の原点、「東海豪雨」を忘れない 6

はじめに 9

第1章　矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）10年史 11
(1) 矢森協関係年表 12
(2) 10年をふりかえって 14
(3) 矢森協に関係する団体、行動、影響等の関係 18
(4) 年表こぼれ話（座談会より） 20
＜コラム＞矢森協はどうして「矢森協」になったのか 40

第2章　矢森協の活動実績 41
(1) 森の健康診断
(1)－1　森の健康診断と矢森協とのちょっといい関係 42
(1)－2　森の健康診断　全国展開支援事業(出前事業)　～その経緯と実績～ 44
(2) モデル林事業
(2)－1　モデル林事業で目指したこと 50
(2)－2　旭木の駅プロジェクトとの連携　～地域とのつながり～ 54
(2)－3　地域と企業のつながり　～トヨタ車体グループとの連携～ 56
(3) 矢森協と「とよたオイスカ森林塾」、「とよた森林学校」 60

第3章　矢森協加盟団体の活動レポート 63
(1) 各団体活動レポート

山仕事実践の会	64	NPO法人 名古屋シティ・フォレスター倶楽部	66
足助きこり塾	68	とよたオイスカ山守の会	70
小原こだまの会	72	足助高嶺下（こうろげ）の森クラブ	74
足助あやど森林クラブ	76	とよた杣人会	78
とよた蒼の森クラブ	80	とよた旭高原山楽会	82
矢作有山会	84	森の風モンターニャ	86
もりびと蒼山会	88	とよた あす森会	90
とよた やまびこの会	92		

(2) 矢森協加盟団体一覧表 94

第4章　＜寄稿＞　10年の想いを込めて 矢森協へのメッセージ 95
島﨑洋路、鈴木 章、洲崎燈子、藤原祥雄、小川光夫、蔵治光一郎、林 冨造、新見克也

おわりに 104

第１章
矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）10年史

2004年1月18日に大雪の中、発足式を行ってから今年で10年を迎えました。現在、15団体が加盟し、メンバーは200人を超えています。また、矢作川森の健康診断を通じて全国各地とつながり、木の駅プロジェクトを通じて地元とつながるなど、縦横無尽に仲間づくりを進めてきました。

本章では、草創期から、準備期、始動期、充実期と大きく分けられる矢森協の歴史を改めてふりかえってみました。この10年の先に、新たな10年が続きます。

(1)矢森協関係年表 (項目の前の数字は月。矢森協関係者の敬称略)

期	西暦	平成	矢森協関係	豊田地域の森林ボランティア関係
草創期	1994	6		
	1995	7		
	1996	8		
	1997	9		
	1998	10		
	1999	11	稲武やまあいクラブ発足(後のどんぐりの里・森づくりの会)	
				あすけ里山ユースの間伐ボランティア開始
	2000	12	1:名古屋シティ・フォレスター倶楽部発足	稲垣がKOA森林塾通年コースに参加
			1:山仕事実践の会発足	
準備期	2001	13		
				8:丹羽が鈴木政雄氏に出会う
			12:足助きこり塾発足(KOA森林塾OB中心)	10:丹羽がKOA森林塾の集中コースに参加
	2002	14	1:間伐応援隊(下山班)発足	足助きこり塾でチェーンソーパンツ着用開始
	2003	15		2:第1回とよたオイスカ森林塾
			3:どんぐりの里・森づくりの会発足	3:第2回とよたオイスカ森林塾
			7:とよたオイスカ山守の会発足	
			10/16:矢森協のプレ発足(代表はオイスカの小杉所長)	
始動期	2004	16	**1/18:矢森協 発足式(6団体)**	発足式に併せボランティア間伐大会を実施(旭)
			矢作川水系森林ボランティア宣言発表	
			以後、この日を矢森協発足の日とする	2:第3回とよたオイスカ森林塾
			6:小原こだまの会発足	
			この頃、出材した木材は万博用ベンチの材料に提供	
			10:山林(やま)の健康診断開始	
			12:第1回矢森協合同研修会開催(以後、毎年開催)	12:第4回とよたオイスカ森林塾
	2005	17	5:森林ボランティア協働間伐モデル林事業開始	
			7:足助高嶺下(こうろげ)の森クラブ発足	
			9:間伐・間伐材利用コンクール(林野庁後援)で入賞	
			12:北小田で間伐モデル林事業を行う	
	2006	18	4:代表が丹羽健司に	3:第5回とよたオイスカ森林塾
			5:足助あやど森林クラブ発足	
			12:トヨタ車体の支援で間伐モデル林事業開始(5年間)	11:とよた森林学校 第1回森林塾(注)
充実期	2007	19	2:合宿で地元住民、インストラクターと間伐を実施	9:とよた森林学校 第2回森林塾
			3:とよた杣人会発足	
	2008	20	2:とよた蒼の森クラブ発足	森林学校でステップアップ講座を実施(3年間)
				9:とよた森林学校 第3回森林塾
	2009	21	1:とよた旭高原山楽会発足	9:とよた森林学校 第4回森林塾
			※この頃から先輩グループが後輩を"教え合い"	
	2010	22	1:矢作有山会発足	9:とよた森林学校 第5回森林塾
	2011	23	3:森の風モンターニャ発足	9:とよた森林学校 第6回森林塾
	2012	24	2:もりびと蒼山会発足	
			4:トヨタ車体グループ「企業の森」活動の支援開始	
			7:「安全」について議論を経て、安全講習会を実施	9:とよた森林学校 第7回森林塾
	2013	25	2:とよた あす森会発足	9:とよた森林学校 第8回森林塾
	2014	26	1:矢森協10周年	
			1:とよた やまびこの会発足	9:とよた森林学校 第9回森林塾
			10:矢森協10年誌(この冊子)を発行	

(注)森林塾は通称名。とよた森林学校の講座名は、2006年「森林塾」、2007年「間伐応援団養成講座」、2008年以降「間伐ボランティア初級

（文責：原田）

森健	行政関係	その他	西暦	平成
	2：県林業振興基金発足。担い手育成事業開始	KOA森林塾開塾（長野県伊那市）	1994	6
	4：豊田市矢作川研究所が第3セクター方式で設立	4：豊田市が水道水源保全基金の積立を開始		
			1995	7
	山里あすけ森林協力隊事業（足助町）	森づくりフォーラムが森林ボランティア保険開始	1996	8
	間伐支援隊事業（県）。森林協力隊に山本が参加	穂の国森づくりの会発足	1997	9
	間伐支援隊事業（県）		1998	10
	間伐支援隊事業（県）		1999	11
		12：島崎先生「山造り承ります」発刊		
	間伐支援隊事業（県）	1：森づくりフォーラムが法人化し全国組織に	2000	12
		9：東海（恵南）豪雨		
	4：丹羽が東海農政局豊田出張所に異動		2001	13
	4：原田が豊田市役所農林課に異動			
	1：丹羽が山林所有者の意識調査を実施		2002	14
			2003	15
	3：丹羽が東海農政局で「素人の山仕事入門」発行			
	4：豊田市矢作川研究所が市営化	豊田加茂地域振興計画策定調査（H15、16年度）		
			2004	16
		7：都市と農山村交流スローライフセンター発足		
準備開始		11：洲崎さん、蔵治さんとの連携始まる		
	4：7市町村広域合併（原田が初代森林課長に）	2：スローライフセンターNPO法人化	2005	17
6：第1回	4：7森林組合広域合併	3：愛知万博開幕。間伐材ベンチ出展		
	森林ボランティア始動支援補助事業開始	7：日本国際里山ワーキングホリデーに参加		
		10：土岐川・庄内川源流森の健康診断に協力		
4：本出版	4：とよた森林学校開校（校長は島崎洋路先生）		2006	18
6：第2回	森林ボランティア団体への保険代補助開始			
	12：森づくりシンポジウム開催（内山節氏講演）			
1：全国会議	3：豊田市森づくり条例可決。4/1施行	2：恵那市の校長会、教頭会に「子どもの森の健康診断」実施に向けての意向調査依頼	2007	19
6：第3回	3：豊田市100年の森づくり構想発表			
4：環境賞受賞	森林活動の森事業で企業との共働事業開始		2008	20
6：第4回		森の健康診断全国展開、出前事業開始		
6：第5回		5：豊森なりわい塾発足	2009	21
		10：恵那市で「子どもの森の健康診断」開始		
6：第6回			2010	22
6：第7回		7：旭木の駅プロジェクト実行委員会発足	2011	23
			2012	24
6：第8回		6：森林・林業白書に矢森協の活動が載る		
6：第9回		2：矢作・森の女子会の動き始まる	2013	25
			2014	26
6：第10回				
10：報告会	10：森づくり10年と森健10年の報告会を合同で開催			

講座」

(2) 10年をふりかえって

丹羽　健司

● 大激論の2012年評議会

「ちがうんじゃないか」。西川さんがキッと顔を上げた。シゲさんが少ない髪をかきむしり、稲垣さんが頭を抱えていた。2012年春の矢森協の評議会だった。

前年から骨折やあわや大事故というヒヤリ・ハット事故が続いた。見るに見かねて稲垣さんが安全対策会議を呼びかけた。2月3日、私はその会議への全グループ代表の出席を「指示」した。その時のメールの最後にはこうある。「一方的とのそしりを受けることを承知で提案します。提案というより8年間で初めての指示です」。矢森協で初めての強制的な指示だった。

4カ月にわたり会議を重ねていくうちに、突っ込み伐りはやめよう、何はイカン、これもイカン、掛かり木処理の時のあれはなんたらかんたら…もう全部出尽くした。もう何にもしないのが一番安全ということになる。「そんなことなら矢森協なんかやめちゃえ！」。激論が交錯した。そんな重苦しい空気の中で、私はオロオロすると同時に、どうなるんやろ？とどこか他人事のように見ていた。

「仲間じゃないか、見守り合えばいいじゃないか」。西川さんが続けた。その一言で空気が一変した。誰もが同時に「そうだった」と思った。俺たちにはいつも仲間がいるじゃないか、矢森協は仲間づくりの運動だった。複数人作業でお互い見守り合おう、迷ったら相談しよう、危ないと思ったらすぐ指摘し合おう、そんな関係を俺たちはつくってきたはずだ。とみんなガッテンした。

そして、弱さの情報公開。今日あったヒヤリ・ハットはすべてさらけ出そう。ベテランだからとか新米だからとか遠慮せずに危ない時は指摘し合おう。俺はそんなのへっちゃらだなんていう自慢話でなく指摘し合える関係、弱さを持ち寄れる関係を構築していこう。作業の最初と最後はそれに時間を割こうと確認し合った。

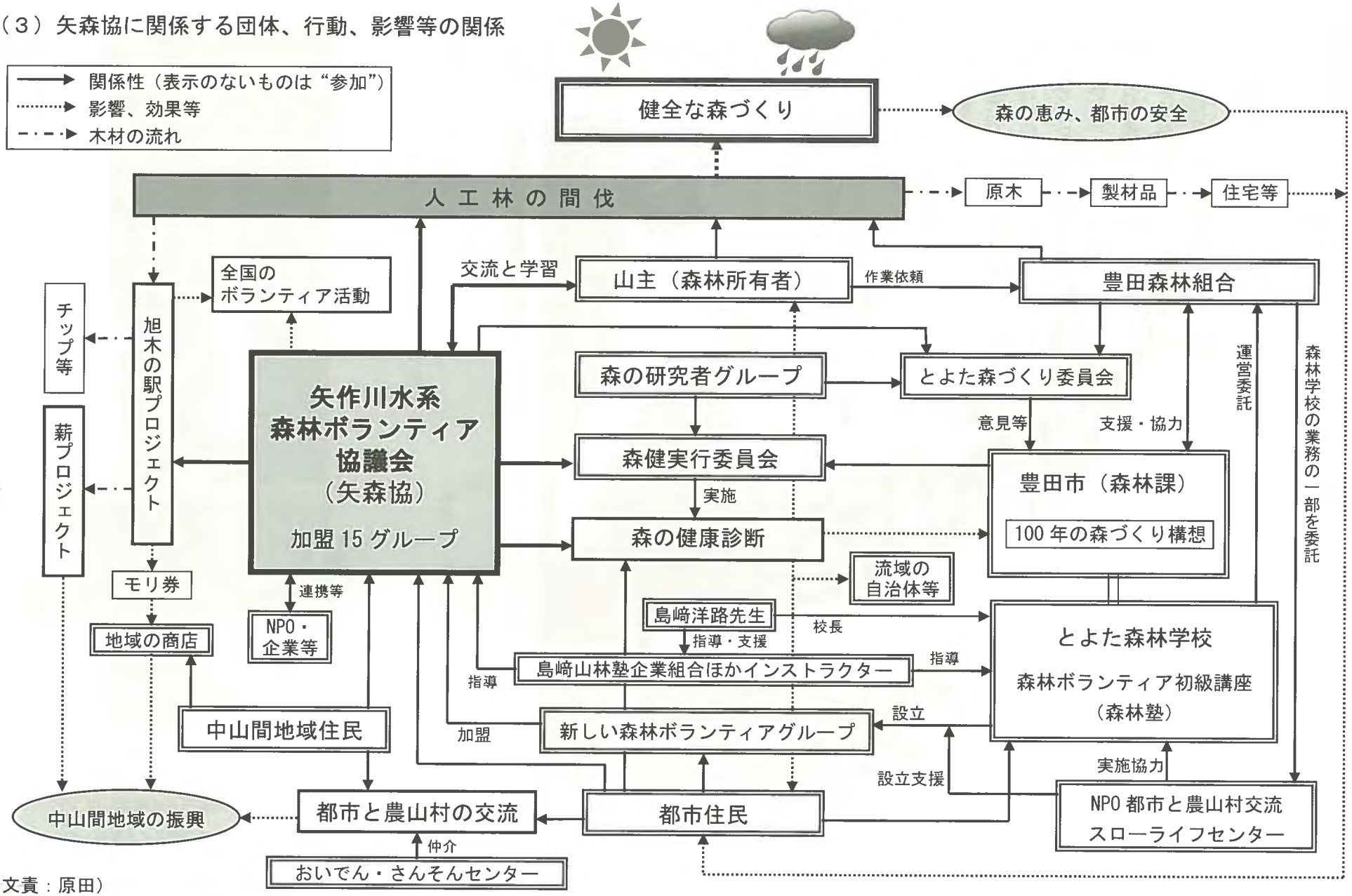
そうだ仲間づくりだ。背筋がぞくぞくビリビリした、矢森協を惚れ直した至福の瞬間だった。矢森協の一員であることをこれほど誇りに思った時はない。

● 素人山主さんと一緒に

「こんなの初めてだよなぁ。面白かった。俺らもちょっとやるか」…地元山主さんたちが話しながら歩いている。2008年12月21日、岡崎市鳥川（とっかわ）地区で「森林ボランティアと山里協働間伐モデル林」第9号が始まった。子どもの森の健康診断の跡地をモデル林として整備することになったのだ。その日は矢森協から10人、地元山主さん10人、講師として杣の杜学舎から鈴木章氏を招いての2009年度事業のキックオフだ。樹齢35年0.2haのヒノキ林を子どもたちの健康診断結果に沿って間伐する。

まず4組に分かれて山に入り、釣り竿を回して100㎡内に13本程度残すように選木する。テープを各自に持たせて間伐するべき木に巻く。悩みながらも他人の山だからか手際よく進む。だいたい巻き終えると山主たちは広場に戻っていよいよ講習会。残った矢森協のメンバーは、山で間伐を始める。山主たちはそれぞれ納屋から引っ張り出してきたチェーンソーで講師から目立ての講習を受ける（写真下）。最初に各自のチェーンソーで玉切りをすると粉がふく。そう、

（３）矢森協に関係する団体、行動、影響等の関係



（文責：原田）

矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協（やもりきょう））10 年誌

森が元気に、人が元気に　　仲間づくり 10 年のあゆみ

発行年月：2014 年 10 月

企画編集：矢作川水系森林ボランティア協議会

発行：矢作川水系森林ボランティア協議会

〒450-0001　名古屋市中村区那古野 1-44-17　嶋田ビル 203
TEL：090-4160-9065　　FAX：052-581-8161
E-mail：yamorikyou@yahoo.co.jp